

VOICE

参加者の声

保育士より

自然の偉大さを肌で感じ、何かを探し見つけたときのうれしそうな子どもたちの笑顔が印象的でした。

活動の流れがスムーズ。どの活動にもねらいがしっかり設定されていることに驚き。

静と動のバランスがとても良い。声なき声を聞く時間、とても感動しました。

保護者より

公園で遊ぶのとはまた違う自然とのふれあいがとても新鮮でした。

園児より

チョウのヨウチュウ、ウンコみたいやった。

つるつるしていた、ざらざらしていた、気持ちよかった。



長田智加代 (ながた ちかよ)
千坂保育園主任保育士

園の自主活動で継続

森での子どもたちは、本当にいきいきとしています。今年は冬の森へも行きました。雪の上を歩いて小山を登ってみました。ウサギのうんちを探してみたり。晴天の下、雪景色を目にして、何とも言えない表情を見せてくれた子もいました。

「森って楽しい」の気持ちは、園の小さな子どもたちにも伝わります。体験した年長さんが嬉しそうね。ドキドキ・ハラハラ、これらも貴重な体験です。自然のリスクから、人も動物も共存していることが身を持って分かるのですから。少し足を延ばせば、そこには豊かな自然があります。五感をフルに使うこのプログラムは、成長過程にある子どもたちの感性をとても豊かなものにしてくれます。だからこそ、1回きりのイベントではなく、体験を積み重ね、継続していきたい。20年度にもりの保育園プログラムの実施園という形でスタートしましたが、今後は園の自主活動として継続していく予定です。

うに話すんですよ。それを聞いて、年中さんは「次は自分が行ける」とわくわくしてその日を待つわけです。もちろん自然は楽しいばかりではありません。以前、スズメバチが飛んできたことがありました。そのときは、みな石のように動かず、ハチが去るのを我慢強く待ちました。いなくなった途端、子どもたちからは大歓声。恐怖心から解放された安堵と、自分は我慢できた、という達成感の両方でしょうね。ドキドキ・ハラハラ、これも貴重な体験です。自然のリスクから、人も動物も共存していることが身を持って分かるのですから。少し足を延ばせば、そこには豊かな自然があります。五感をフルに使うこのプログラムは、成長過程にある子どもたちの感性をとても豊かなものにしてくれます。だからこそ、1回きりのイベントではなく、体験を積み重ね、継続していきたい。20年度にもりの保育園プログラムの実施園という形でスタートしましたが、今後は園の自主活動として継続していく予定です。

視・聴・嗅・味・触 五感をフル活用

絵に木の枝や根っこが

プログラム体験後、子どもたちの絵にも変化がありました。空と太陽が中心だった絵に、しっかりと木が描かれるようになりまし。単なる棒ではなく、枝が出て、さらには木の根っこまで。体験があるので描けるんです。自然に触れ、五感を使うことで、子どもたちは自然の不思議さ、命の尊さ、怖さなどを感じ取り、結果的に心が育ちます。観察力はもちろん、集中力も。友達を気遣う姿も見え、協調性もついてきました。若い保育士の先生も変わりました。

保護者アンケートから、子どもたちの自然への興味や関心が高まり、家でも森での話をしていくことが分かりました。「今後も続けてほしい」、「いつもと違う子どもの表情を見ることができた」など、とても好意的な意見をいただいています。このように森を楽しめるのは、プロの指導者であるインストラクターさんのおかげです。子どもの反応を見ながらプログラムを進めて下さるので、子どもたちが話を聞くんです。聞く耳を持つと、集中力も育ちます。保育士も、子どもを感じ取るために、日々感性を磨かなければと感じています。



た。保育士自身が、自然の美しさや面白さ、素晴らしさに感動し、この学びを保育に役立てたいと意欲を持つようになったのです。当初は物事を漠然と捉えるのみだったのが、子どもの反応やつぶやきに耳を傾けられるようになり、以前にも増して、子どもの気持ちや心の中を大切にしながら保育するようになりました。

自然の話は家庭でも

木谷一人 (きだに かずと)
いしかわ自然学校インストラクター。
「とりのなくぞう企画」を主宰し、幼児を対象とした自然教室を開催している。



自然の中におじゃまする気持ちで

「このままだと大変なことになる」「早く手を打たなくては」など、今、環境教育というと、マイナスのイメージが先に来ているような気がします。ちょっと怖い感じがしますよね。それよりも「自然って素敵だね。面白いよね」というプラス面から入ることを大切にしたい。もりの保育園では、森におじゃまするといふ感覚を大切にしてきました。森に着いたら、まずみんな「おじゃまします」とあいさつをします。そうすることで、森に住むものへの意識が深まるんですね。

普段、毛虫を見たら大騒ぎするだろう子どもたちが、毛虫さんちよつとごめんなさいと声をかけられるようになる。人間と自然とが共生共存していることに、感覚で気づいていくのだと思います。帰るときにも、「おじゃましました」とあいさつ。森からの返事を聞くため、少しの間、静かに耳を澄ませます。子どもたちに「何か聞こえた？」と聞くと、「また来てね〜」だつて、など。それぞれが想像力を膨らませて、森からの返事を伝えてくれます。最初はふざけていた子も、森とのお別れときには、真剣に森の音を聞こうという姿になります。子どもたちの変化にはいつも驚かされます。

子どもたちの「気づき」を大切に
プログラムの中では、ドングリを拾ったり、木に触れたり、幼虫の観察をしたりします。絵本でしか見たことのないアゲハチョウの幼虫を実際に見た子どもたちの喜びようは面白いですよ。知識で得たものが実体験に結びついたとき、それは大きな学びとなります。急な坂道やぬかるみを歩くこともあります。平衡感覚、基礎的な体力が必要とされます。普段平らなところしか歩かない子には最初はきついようで、よく転んでいきます。もちろん、プログラムは楽しんでもらいたい。でもそれ以上に、何かに気づくきっかけにつながることを願っています。体験の中で、面白い、素敵だ、と思えることをひとつでも見つけてもらえたら、と。そのときに不可欠なのが、子どもたちの気づきを受け止める大人の存在。子どもたちの中には、自分の気づきを聞いてほしいという気持ちが芽生えています。人と自然との関係性が、人と人との関わりに広がっていくんです。



継続することの重要性

活動をしていて感じるのが、継続することの重要性です。「ああ楽しかった」で終わるイベントではなく、次につながる何かを大事にしたい。一度参加していただいた保育園では、その後、園でのお散歩のときに、風の音を聴いたり、葉っぱを観察したり、木に触れたりする子どもたちの姿が見られるそうです。とてもうれしい報告です。

自然体験が子どもたちにもたらすものは計りしれません。体力、コミュニケーション能力、想像力、創造力、感性、自分を表現する力など、これから成長していく上で大切な力となります。子どもたちは、自然からのメッセージを受け止める力を自ら育んでいくのが上手です。では、大人には何ができるのか。それは、子どものスイッチを押すことではなく、「ここにスイッチあるかもよ」とさりげなく教えることだと思えます。そして子どもからの気づきに応えること。OKを出してあげること。失敗もOK。どんな形もOKです。

体験後のお子さんの変化などを聞かせて



木を描くときに、根っこまで描き入れるようになりました。

▲千坂保育園児の描いた絵

見慣れた木に興味

園庭の見慣れていた木にも興味を示し、音を聞いてみたり、手触りを確かめたりしていました。また、図鑑で調べるようになりました。(保育士)

思いを分かち合う

友達同士で「森って楽しい!」「〇〇みつけたよ〜」と、思いを分かち合う姿が見られます。(保育士)

音に対して敏感に

自然の音に対して敏感になったようです。身近な「もの」の音にも興味を持ち始めました。(保育士)